



## 報 告 【学会支援】

# 「学会支援によるまちづくり」

だて学会支援ボランティア実行委員会・委員長 堅田 進氏



### はじめに

平成26年秋、伊達市では考古学と人類学の二つの学会が開催されました。一つは「日本考古学協会伊達大会」(10月11～13日)、二つ目は「人類学国際会議」(11月30日～12月6日)です。

私たちはこれらに市民ボランティアとして関わり、国内外から来られる先生たちのお役に立てるよう、大会の運営と「おもてなし」を行いました。ここでは2つの学会支援について報告します。

### 1.なぜ学会を支援するのか？

伊達市で初めて学会を支援したのは、平成15年10月に開催された第57回日本人類学会大会です。多くの学会の研究発表は大学を会場とし、会場の運営は教員や学生があたるのが普通です。

しかし、伊達市には大学がありません。そこで「市民がつくる人類学会実行委員会」を立ち上げて市民が大会運営を支えることとしました。実はこの組織が母体となって今の研究所支援組織「かけはしの会」(菅俊治会長 平成17年4月設立)になっています。

今回は年に2つの学会を支援するため、かけはしの会に加え、噴火湾考古学研究会（洞口雅章会長）とオコンシベの会（佐久間重行世話人代表）と一緒に実行委員会をつくり、対応することとしました。

これまで5回の学会開催を支援しましたが、なぜそのようなことをするかというと、一つは伊達の子供たちに知的な刺激を与えることです。そのため

### ■これまでの学会開催

- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 1997年 | 北海道考古学会研究大会       |
| 2003年 | 日本人類学会第57回大会      |
| 2004年 | 生態人類学会第10回研究大会    |
| 2005年 | 日本オセアニア学会第22回研究大会 |
| 2005年 | 第9回動物考古学研究集会      |
| 2010年 | 日本人類学会第64回大会      |

に小学校で出前授業を行い、超一流の研究者に最先端の研究成果をわかりやすく教えてもらいました。

また、研究発表はすべて一般公開とし、誰もが学会の雰囲気を味わえるようにしてもらいました。学会ボランティアは会場の受付や質疑応答のマイクの受け渡し、お弁当の配布などを行い、時間が空いたときは興味のある発表を聞くなどしていました。

そして、もう一つは来場された研究者の方々に伊達の応援団になってもらいたいとの思いがあります。よそでの大会とは違い、市民によるおもてなしを受けた先生たちが、伊達に対してよい印象を持ってくれ、その後も様々な立場で伊達市を応援してくれればまちのためになると考えたのです。実際、さっそく「こ



日本考古学協会伊達大会は2つの会場で研究発表が行われました。最終日のエクスカーションでは、発掘中の伊達市若生貝塚の2mを超える貝層を見て、専門家たちも驚いていました。

この伊達市民」へ登録してくれた先生もあり、何度も伊達を訪れてくれています。

## 2.日本考古学協会2014年度伊達大会

日本考古学協会は会員数4000名を誇る日本の考古学会で最大の組織です。毎年秋には全国規模の大会を行っており、北海道では1999年の釧路大会以来の開催でした。

遠くは鹿児島県からの参加者もあり、約300名が来場しました。

大会のテーマは「貝塚」や「ストーンサークル」といった北海道の特色を出したもので、縄文～アイヌ文化までのさまざまな研究発表がなされました。

## 3.人類学国際会議「RNMH2014」

正式名称は「ネアンデルタールとサピエンス交代劇の真相」【Replacement of Neanderthals by Modern Humans】という、高知工科大学の赤澤威教授が主催するプロジェクトの国際会議です。20万年前に現れた私たちホモ・サピエンスが、それ以前にいたネアンデルタール人に取って代わった理由を探ろうとい

う内容です。

これは世界的な研究課題ですので、フランス、ドイツ、アメリカなどから44名の外国人研究者を含む91名が参加しました。

初日の一般向けの講演会は同時通訳で行いましたが、その他の発表と質疑応答はすべて英語でした。今回は英語に堪能な銀行員やホテルマンにボランティアとして参加してもらつたため、スムーズな運営ができました。

## 4.伊達の「おもてなし」

会場となつただて歴史の杜カルチャーセンターのホワイエでは、伊達らしいおもてなしとして呈茶サービスが行われました。茶道裏千家淡交会伊達支部（串田宗清幹事長）と茶・同好会泉（岡田宗信代表）の皆さんの協力により、美味しいお抹茶を味わつてもらいました。特に外国人の方々はとても興味を持ったらしく、期間中に何度も足を運ぶ方もいました。

また、国際会議のランチタイムには、会場の2階を臨時のレストランにして料理を提供しました。伊達の野菜などの特産品を用いた料理のほか、ベジタリアンやイスラム教徒へも配慮し、とても好評でした。



人類学国際会議ではインターナショナルな雰囲気の中、1週間にわたり熱い議論が交わされました。受付を担当した学会支援ボランティアの中には伊達緑丘高校の生徒の姿がありました。海外の研究者が集う学会に興味があり参加したこと。



## 5. 子供たちへの出前授業

さて、学会を支援する「見返りに」といっては語弊があるかもしれません、先生たちには伊達の将来を担う子供たちに対して授業をしてもらうことを企画しました。

伊達市立東小学校では名古屋大学博物館の新美倫子准教授による「縄文食を作つてみよう！」を行いました。石でクリをすりつぶし、卵や肉を混ぜてゆでたものをみんなで食べました。

また、伊達小学校では、東京大学の設楽博己教授が「卑弥呼さんってこんな人」、日本大学松戸歯学部の五十嵐由里子講師が「縄文人のお産のはなし」という楽しい授業がありました。

考古学や人類学の第一線で活躍する研究者に直接教えてもらえた子供たちは、とても目を輝かせていま

した。彼らの中から未来の研究者が育つかもしれませんし、そうではなくてもテレビに出てくる先生に習ったことや、縄文人の骨を触ったことなどをいつまでも覚えていてくれれば嬉しく思います。

## おわりに

二つの学会が終わったあと、主催者である先生方からお礼のお手紙をいただきました。伊達ならではの企画について、驚きと称賛の内容でした。半分はお世辞だとしても、一生懸命取り組んだ甲斐があったと思います。

これも一重にともに汗をかいたボランティアの皆さまのおかげであり、茶道の会や小学校の協力によるものであります。最後になりましたが、関係されたすべての皆さんに心より感謝申し上げます。



東小学校での「縄文食を作つてみよう！」（上段）と伊達小学校での出前授業（下段）。弥生文化研究の第一人者である東京大学の設楽教授から直接「卑弥呼」の話を聞くことができました（下段左）。終了後に骨格標本と握手する児童（下段中）。